

# 深イ～話！

No.64

——「鬼が笑った日」より（鬼画作家 しの武）——

手渡された母子手帳を持つ手が、緊張で小刻みに震えていました。邪魔だから捨てられたのだと思いつけてきた私にとっては、顔も見たことのない母親とまるで初めて会うような感覚で、何だか怖くて仕方ありませんでした。震える手で表紙を撫でると、それだけで目から涙がポロポロ落ちてきます。私は意を決すると、そっと母子手帳を開きました――。

私が幼少期を過ごしたのは、父方の実家がある山口県防府市南部の瀬戸内海に浮かぶ向島<sup>むこうじま</sup>でした。二歳の姉と生まれたばかりの私を祖父母に<sup>ゆだ</sup>委ねると、母はそのまま姿をくらませてしまったのです。

母親に代わって愛情を注いで育ててくれた祖母を四歳の夏に突然の病気で失うと、今度は当時ヤクザだった父が刑務所に収監される事態に。祖父は親戚との話し合いの末、私たち姉妹を児童養護施設に預けるという苦渋の決断を下しました。それまで味わったことのない規律ある集団生活を姉は嫌っていましたが、私は守られているという安心感に包まれながらスクスクと育っていきます。

父が私たち姉妹を施設に迎えに来てくれたのは、私が小学校五年生の春のことでした。再び父と暮らせる嬉しさに胸を膨らませる半面、いっしょに暮らす<sup>ままはは</sup>継母と連れ子二人、合わせて六人での新生活はぎくしゃくとした不自然さがつきまといまいます。

新しい生活に必死に馴染もうとする私を横目に、まず姉に異変が起きました。もともと破天荒な性格だった姉は、施設の生活から解放されると、それまでの不満を一気に噴出させるかのように非行に走ったのです。

さらに女遊びを繰り返す父が徐々に家から遠ざかっていくと、継母のストレスのはけ口は自然と私に向けられていきました。

二度と父とは離れたくない。そんな思いでどんな理不尽にも耐えてきた私でしたが、ピンと張りつめていた緊張の糸を継母が切り裂きました。それは消したくても消すことのできない、深く心に刻まれた言葉でした。

「知っちゃった？ あんた本当はいらん子じゃっらしいよ。」

込み上げてくる怒りに似た感情を、誰にぶつければいいのか私にはわかりませんでした。時とともにそれまで抱いたことのない憎しみ、嘆きや怒りなどの感情がとめどなく湧き上がってきます。勢いよく広げた大学ノートはどす黒い感情の塊で埋め尽くされていきました。

もうどうでもいい――。なぜ自分は生きているのか、生まれてくる必要があったのか、と子供ながらに真剣に考えたのはこの時が初めてでした。

そして、二度と家に戻らないと胸に誓って家を出たのは十四歳のこと。当てもなく彷徨<sup>さまよ</sup>う私を助けてくれたのは、当時島根県にある彼の実家に身を寄せていた姉と、その彼の母親でした。

いつか幸せな家庭を築きたいと願うようになったのは、こうした境遇に身を置いていたからでしょう。それは中学校卒業直後の結婚、そして出産というかたちで早々と訪れましたが、残念ながらうまくはいきませんでした。

十六歳の母親に対する周囲の厳しい目、バブル経済に踊らされた夫の目に余る行状、そして孤独な子育てが私を追い詰めていったのです。もしこの時、献身的に支えてくれたある女性の存在がなかったら、いまの私はきっといなかったでしょう。

後に子供二人を抱えた私を受け入れてくれた現在の夫が現れたことで、三十代にして私はようやく自分の居場所を得ることができたのです。

鬼画を描くようになったのは、<sup>さかのぼ</sup>遡ること九年前、友人のリクエストでつくったカレンダーがきっかけでした。評判も上々だったことから、ならば本格的につくろうと何日も考えた末に、鬼をモチーフに言葉を添えるスタイルを思いついたのです。

鬼というと怖いイメージがありますが、誰もが持つ心の弱さ、<sup>ずる</sup>狡さや醜さを浮かび上がらせるには一番適していると感じたのが発端です。過去に大学ノートに吐き出していた様々な感情と向かい合いながら、「自分に負けんなよ」「あなたがいてくれて」など、喜怒哀楽の渦中にいた自分に寄り添うように励ましや慰めの言葉を綴りました。そして愛嬌たっぷりの鬼たちに、体を張って掴んできた言葉を託したのです。

鬼画カレンダーは予想を超える反響を呼び、個展開催や講演にも声がかかるようになりました。そしてあるテレビ番組の企画で訪れることになったかつての児童養護施設。そこには久しぶりに訪れる私のために、置き去りにされていた母子手帳が用意されていたのです。

三十八歳にして初めて手にする手帳には、案の定生まれた日や身長、体重など何一つ書いてありませんでした。ところが、次のページを開くと、「おっぱい良好でした」の一文が目飛び込んできました。「そうか、自分はちゃんと愛されとったんじゃ。」

私はたとえ一時であっても、母の腕に抱かれていた――。

自分の子供を育てた経験と母に抱かれる自分の姿が重なると、心のしこりがウソのように消えていきました。もう嘆くことは何もなくなったのです。そしてこの機を境に、私が描く鬼たちは自分でも気づかないうちに明るく朗らかな雰囲気になっていきました。

「受けた愛情はずっと生きる。ずっとつながる」。後に鬼画に託したこの言葉には、愛情という目に見えないものへの感謝の念と、あなたもまた誰かに愛されているということを感じてほしいという思いが込められています。

☆『しの武』さんは、山口県で「おにの家」というお店で、雑貨と絵を販売しています。小学館より自叙伝「もうなげかない」も出されていますので、興味があれば、ぜひ読んでみてくださいね！



しの武さんの作品